

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2015.12) 平成26年度:33-35.

成人生体肝移植後治療経過が遷延した中で家族機能が保持された要因

末次 さゆみ、池生 瑛美

成人生体肝移植後治療経過が遷延した中で家族機能が保持された要因

旭川医科大学病院 6階東ナースステーション ○末次さゆみ、池生 瑛美

【はじめに】

成人生体肝移植後レシピエントの入院が10か月と治療経過が遷延した中で、家族アセスメントを重ね家族機能が保持された事例を経験した。

【目的】

生体肝移植後治療経過が遷延した患者とその家族が家族機能を保持できた要因を明らかにする。

【方法】

- 1) 対象: 生体肝移植を受けたレシピエント、ドナー、その家族。
- 2) データ収集方法: 診療録、カルガリー家族看護モデルと看護診断に基づいた看護記録、レシピエントの半構成的面接内容を逐語録としデータとした。
- 3) データ分析方法: データを一文一意味ごとにコード化カテゴリー化し治療経過と看護診断に沿って分析した。
- 4) 倫理的配慮: データは個人が特定されないよう管理し倫理委員会承認後研究を開始した。

【事例提示】

レシピエントA氏60代女性。ドナーB氏30代長男。家族員C氏30代長女。X年Y月にNASHによる肝機能障害により生体肝移植施行。移植後合併症により治療経過が遷延しY+10月退院。

【結果】

- 1) 16のサブカテゴリー、3つのカテゴリーが抽出された。
- 2) 『移植を受ける事が母親役割の遂行』心理状況や家族関係把握の為ジェノグラムエコマップを用い看護診断(以下ND) 1 コーピング促進準備状態とND2 家族機能促

進準備状態を診断した。「子供を傷つけて生きる必要はない」と＜子を優先＞するA氏がいた。「気持ちに答えるのも母親」と＜息子の期待に応える＞事が移植決断の要因だった。＜家族のみの治療決定＞である状況、「家族の事になるとそれしか目に入らない」と＜母親からみたドナーの側面＞が見えた。＜治療への自信＞と「家族の道標にノートを書いた」「賭けの治療」と＜治療への不安＞があった。

3) 『危機的状況下の家族内相互作用』治療経過が遷延した中、過度なストレスを予防する為ND1を継続した。「自殺したい。先が見えない」と＜予測できない苦痛＞と「苦しみ悲しむ姿をみてしてよかったのか」と＜治療への後悔＞があった。＜状況を受容＞する事と、「息子の助けたい気持ちを負けない気持ちに」と＜レシピエントとしての役割＞を遂行する事が闘病意欲を向上させた。「いるだけで安心」「二人を看れたのは娘だから」と＜ケアパーソン・キーパーソンである娘の存在＞が精神的安寧につながっていた。

4) 『移植体験が家族のセルフケア能力を向上』家族関係を振り返り闘病意欲を促進する為ND2を継続し家族の言動に対し肯定的にフィードバックした。「守る立場なのに自分の為に傷つけた」と＜子への罪責感＞を感じ、「生んでくれたお礼」と子の言動により＜罪責感から解放＞され、移植を＜家族で向き合う時間＞、＜子の成長を感じる機会＞として捉え＜家族の絆を再確認＞していた。

【考察】

A氏が移植治療を母親役割として決断した事、治療経過が遷延した中で家族内相互作用が肯定的に作用した事、移植体験が家族セルフケア能力を向上させた事が家族機能保持の要因だと考える。

成人生体肝移植後治療経過が 遷延した中で家族機能が 保持された要因



旭川医科大学病院
6階東ナースステーション
○末次さゆみ 池生瑛美

I. はじめに

- * 成人生体肝移植を受けた家族に対し、
家族アセスメントを実施
- * レシピエントの治療経過が10か月と
遷延したが、家族機能が保持された
事例を経験

II. 目的

生体肝移植後治療経過が
遷延した患者とその家族が
家族機能を保持できた要因を
明らかにする

III. 方法

- 1) 対象: 生体肝移植を受けたレシピエント、ドナー、
その家族
- 2) データ収集方法: 診療録、カルガリー家族看護モデルと
看護診断に基づいた看護記録、レシピエントの
半構成的面接内容を逐語録としデータとした
- 3) データ分析方法: データを一文一意味ごとにコード化、
カテゴリー化し治療経過と看護診断に沿って分析した
- 4) 倫理的配慮: データは個人が特定されないよう管理し
倫理委員会承認後研究を開始した

IV. 結果

<事例紹介>

- * レシピエントA氏60代女性
- * ドナーB氏30代長男
- * 家族員C氏30代長女
- * 非アルコール性脂肪性肝炎による肝機能障害により
生体肝移植施行
- * 移植後合併症により治療経過が遷延し術後321日
目に退院

術後日数	0	22	27	30	36	45	84	85~320	321	
イベント	手術前	生体肝移植	冠動脈再建 ドレナージ	腹腔内洗浄 気管切開術	肝死部分切除 肝死部分追加切除	壊死部分追加切除 ドレナージ	腹腔内洗浄 ドレナージ	ICUから一般病棟へ	リハビリ継続	退院
時期	移植前	繰り返す手術・生命の危機					身体機能の回復遷延			
看護診断		ND2 家族機能促進準備状態								
		ND3 家族介護者役割 緊張リスク状態								
		ND1 コーピング促進準備状態								
看護介入	家族関係 の把握	過度のストレス予防					家族関係を振り返る			
		家族相互作用促進					闘病意欲を増す			

1) 移植を受ける事が母親役割の遂行

サブカテゴリー	コード
子を優先	子供を傷つけて生きる必要はない 私の人生のために犠牲になる必要はない
息子の期待に応える	気持ちに答えるのも母親 死を覚悟した息子のためにもやらないわけにはいかない
家族のみの治療決定	息子に変な責任を負わせる人がいなかった 横から何か言われることがなかった
母親からみたドナーの側面	家族の事になるとそれしか目に入らない 息子と娘は正反対の性格
治療への自信	運があるから失敗しない気がする 治療が終わったら子供たちと旅行にでかける
治療への不安	家族の道標にエンディングノートを書いた 贈けの治療 眠ったまですと目が覚めなかったらと考えてしまう

2) 危機的状況下の家族内相互作用

サブカテゴリー	コード
予測できない苦痛	自殺したい、先がみえない いつ苦しきから解放されるかわからない
治療への後悔	苦しみ悲しむ姿をみてしてよかったのか この経過を知っていたら治療しなかったかもしれない
レシピエントとしての役割	息子の助けたい気持ちを負けない気持ちに 息子の手術後の様子が頑張る気力につながった
ケアパーソン・キーパーソンである娘の存在	いるだけで安心 二人を看れたのは娘だから お姉ちゃんが頼りになる大黒柱
状況を受容する	困ったなって気持ちを頑張ろうって気持ちに変換した 負の感情を抱かないで流れに身をまかせた

3) 移植体験が家族のセルフケア能力を向上

サブカテゴリー	コード
子への罪責感	守る立場なのに自分の為に傷つけた 母親がこんなにも子供達を苦しめていいんだろうか
家族で向き合う時間	家族で密に話すことがなかったから新鮮な時間だった 家族のことをそれぞれが考えるきっかけになった
子の成長を感じる機会	子の成長を感じただけでも治療を受けた意味がある ちゃんと大人になったんだなって感じられた
家族の絆を再確認	自立しているけどつながっていることがわかった 移植によって家族の気持ちも関係も左右されなかった
罪責感からの解放	息子が産んでくれたお礼に返しただけどいってくれた 変わらない家族の言動のおかげで負い目を感じなくなった

V. 考察

- 梅谷によると「レシピエントとドナーの二人が同時に侵襲の大きな手術を受ける移植治療は、不安と葛藤を伴い身体的負担と家族の精神的負担は他の治療に比べて非常に大きく、家族を含めた包括的な援助が必要である」
- レシピエントが移植治療を受けることを母親の役割期待だと認識し、遷延した治療経過の中でも役割期待に応えることで、闘病意欲を維持していた
- 危機的状況下の中で役割期待の相補性が成立していたことが、家族のセルフケア能力を高めた

VI. 結語

- 「移植を受ける事が母親役割の遂行」
「危機的状況下の家族内相互作用」
「移植体験が家族のセルフケア能力を向上」
3つのカテゴリーが抽出された
- 家族機能が保持された要因は、危機的状況下の中で家族内相互作用が肯定的に作用し、役割期待の相補性が成立していたことで、家族のセルフケア能力を高めたこと